



心をみがく

学校長 小木曾敏樹

南小学校に勤務してから3年と3ヶ月。月か木のゴミの日に合わせて、学校周りの道路、バス停、学校敷地内のゴミ拾いを週に1回行っています。目的は、ゴミが落ちている道を登下校させたくないため、学校や学校周りの状況を把握するため、お世話になっている地域に少しでも貢献するため、この三つです。一時間弱かかるので、行事や来客があると行けませんし、雨天や出張などでできない日もあります。

学校周りの道路には、あまりゴミは落ちていません。それぞれのご家庭が自分の家の前の道路も掃除してくださっているからでしょう。一番ゴミが多いのは、バス停です。空き缶、ペットボトル、菓子の袋、マスク、ティッシュといろいろなものが落ちていますが、一番多いのが紙巻きたばこ（火を付けて吸うたばこ）の吸い殻です。学校とプールの中の道にも、毎週何本かの紙巻きたばこの吸い殻があります。学校前と分かっていて捨てる人の気が知れません。



バス停近辺に落ちているたばこの吸い殻は、毎週20本以上。その中には、口紅が赤々と付いたたばこが必ず数本落ちています。時間をかけてきれいに化粧をしても、吸い殻を平気で捨てるような心では、外見だけきれいに見せても、本当のきれいさにはならないのになあと思いながらその赤い吸い殻を火ばさみで拾っています。ゴミ拾いをしながら、この子たちが大きくなったときに、平気でゴミを捨てるような大人にはなりませんように・・・、などと思いながらゴミ拾いを続けます。

学校には「掃除」の時間があり、子どもたちが教室や廊下、体育館やグラウンドを掃除します。長期休業の前には大掃除があり、その後にはワックスがけも行います。世界の国々では、学校の掃除は業者が行い、子どもたちが掃除をするという時間も指導もないそうです。給食も自分たちで配膳することではなく、並んで受け取り食べるそうです。海外から日本の教育を視察に来ることがあります。私も20年近く前に、アメリカの教員約20人が中津川に視察に来た際、4日間くらいお世話をしたことがあります。やはり、掃除や給食、集団での登校、集団での学習や行動などに強く興味を抱いていました。学校の役割は学習指導、その他は家庭の責任と海外ではなっているのに対して、日本は学習指導に加え、生活指導を行っています。海外からの観光客が、日本の美しさ、特に町中にゴミが少ないことを称賛し、最近ではサッカーなどのスポーツ観戦でのサポーターの行動に世界が注目しましたが、これも日本の学校教育が担ってきたところが大きいのではないかと思います。

海外のようにすれば、教員の多忙化、過労死ライン問題も解決するのにも思う反面、日本らしい教育のスタイルが守られてこそ、日本らしさがあるとも思います。学校生活の全て、授業も掃除も給食も、遊びもケンカもトラブルも、全てが全て学びだと感じています。掃除や下級生のお世話、リーダーとしての活動や奉仕的な活動を通して、子どもたちは、自らの心をみがいていると感じています。家では見せない輝きを、学校では日々輝かせている子ども多いはず。その美しい輝きを曇らせてしまうような大人にはならないようにしたいと思う。

PTA本部役員さんによる挨拶運動で生まれるもの

昨年度の後半から、毎月1回、1週間行うというスタイルで、PTA本部役員さん方による挨拶運動が行われています。毎月の1/6は、朝から学校に来て、約30分間挨拶運動をしてくださっているわけです。登校してきた代表委員会や生活委員会の子たちもそれに加わり、大人と子どもで取り組む挨拶運動になっていきます。

今月の挨拶運動は、10日（月）から14日（金）まで、今日が最終日でした。シャイでおとなしい子が多いみなみっこですが、少しずつ近くに寄って挨拶できる子が増えてきたように思います。毎月行ってくださることで、親近感、安心感ができてきたのではないのでしょうか。

挨拶運動は、挨拶ができないから、挨拶の声が小さいから行うというだけではないと思います。もちろん、挨拶運動で素敵な挨拶ができるようになることはとてもいいことですが、それよりもっと大切なことがあると思っています。

それは、「適切な大人が、適切に関わる」ことの効果です。〇〇くんのお父さん、〇〇さんのお母さんというだけでなく、1人の大人として子どもたちと接することによって、私たちのために来てくれている、挨拶してくれている、大切にされているという安心感や信頼感を子どもたちがもつことです。親や先生以外の大人と接することは、子どもの中の頼れる、信頼できる大人サンプルが増えることになり、見守られているという安心感が心の安定感につながっていくと考えます。子どもたちは、大人たちとのつながりを実はとても欲しているのです。慣れてくるといろいろなことをおしゃべりしたり、質問してきたりします。南の子どもたちはこの半年間で、守られているという安心感を確実に深めたのではないのでしょうか。

